清濁の架け橋

エッセイ月曜クラス　白土　裕治

歩んできた人生の道のりを、川の流れに例えるならば、その両岸を結ぶ橋は、生きざまから発する、「感情の交叉点」と重なる。

ドイツ駐在後、隣国チェコへの赴任が決まり、二〇一〇年春から古都プラハにて、鳥のさえずりで目が覚める朝が始まった。

中世ヨーロッパを彷彿とさせる街並みは、見飽きることがなく、運んだ足の回数だけ新たな発見がある。中でも丘陵にそびえるプラハ城と、天文時計台で有名な旧市街地の情景には心が奪われ、沈黙さえも心地よい。

これら二つの歴史景観の間には、水量豊かなブルタバ川が流れ、人々の往来を支えるのは、六百年を刻んだ石造りのカレル橋だ。

幅十メートルの石畳が五百メートル続き、欄干上に並ぶ三十体の彫像や、大道芸人、楽器演奏、露天商が観光客を楽しませてくれる。

過去渡ってきた橋は多々あるが、これほどまで喜怒哀楽の襞に、感情が鮮明にしみ込んだのはこの、「カレル橋」だけだ。

着任早々、家族や多くの訪問客とカレル橋を往来し、幸せが凝縮された一年を過ごす。この喜びが長く続くことを願って。

しかしながらリーマンショックの後遺症は地元の取引先を苦しめていた。過大な損失を補う為に、我が社の資産を横領したこの企業に、「怒髪天を衝く感情」をぶつけた。

旧市街地にある裁判所で判決が下ったが、失ったものは戻らなかった。ただただ人間不信に陥らないことをカレル橋の彫像に祈った。

この事件が発端となり、チェコからの事業撤退が決まる。哀れみの気持ちを形にする為古城側の弁護士事務所に赴き、従業員への補償金を積み増す。帰り道、怒りと悲しみをカレル橋からブルタバの流れに投げ入れた。

この地で過ごした三年間、中国人シェフとチェコ人女将が経営する居酒屋で、私的な時間を最大限楽しく過ごす。カウンター端の指定席で一献傾けながら、今日一日を反芻する。「清濁併せ飲む」を異郷で実感するとはね。

懐かしい「初逢瀬」の橋

エッセイ月曜コース　ふうな　はある

「18日　朝から　何も食べていません」

赤色のフェルトペンで書かれた段ボール片を首からぶら下げて座っている男性。その横でグリコのポーズを決め、シャッター音を響かせる若者たち。

ここは、大阪の一大名所「戎橋」だ。

長さ26m、幅11m～18m、桁橋形式で中央に円形の広場を持っている。400年も前から道頓堀川を渡し、大阪の町衆とともに歴史を刻んできた。

「その名は今宮戎の参道であることに由来する」と橋の南詰に掛けられた戎橋銘文にはあるが諸説あるらしい。かつては、近くに人形浄瑠璃の芝居小屋があり「あやつり橋」と呼ばれていた時代もあった。二〇〇七年に道頓堀川へ直結している現在のスタイルになった。これは、デザインコンペによるものだ。

通称「ひっかけ橋」とも呼ばれるこの場所だが、私は「ナンパ」などしたことはない。また、熱狂的な阪神ファンであるが、この橋

から川へ飛び込んだりしたこともない。（カーネル・サンダーズの呪いは気になっている）

四十六年前、高校二年生の正月、生まれて初めて「デート」なるものを経験した。この橋を渡って千日前の映画館に入り、「ラストコンサート」という美しくも悲しい映画を見た。最後のシーンで彼女が涙していた姿にドキドキしたことを覚えている。帰りに立ち寄ったのが橋の麓のハンバーガーショップだ。学校にいる時のように話ができず、注文もすべて彼女がしてくれた。手を繋ぐと言う選択肢さえ持っていなかったあの頃。

この場所は還暦を過ぎた私を青春時代にいざなってくれる。ちなみに、今の妻はその時一緒に映画をみた彼女――ではない。

この日も、橋には人があふれている。六代目のグリコサインのお兄さんは元気いっぱいに観光客を迎えている。

今日は、懐かしいあの店でハンバーガーをテイクアウトして帰ろう。